

2020 年度活動報告



展示風景「平成美術：うたかたと瓦礫 1989-2019」京都市京セラ美術館/平成美術展実行委員会、2021年撮影：木奥恵三

國府理（1970～2014、京都市立芸術大学 美術研究科 彫刻専攻修了）が福島第一原発事故の1年後に発表した《水中エンジン》（2012）は、自作した水槽の中に軽トラックのエンジンを沈め、水中で稼働させる作品である。水槽内の水にはエンジンの排熱によって対流が生まれ、排気管からマフラーを通った排気ガスが室外へと排出される。浸水や部品の劣化などのトラブルに見舞われた國府は、展示期間中、来場者の前でメンテナンスを施しながら稼働を試み続けた。

國府の創作上においても、「震災後のアート」という位相においても重要な《水中エンジン》だが、発表の2年後に國府が急逝し、使用されたエンジンも廃棄されていたため、展示はほぼ不可能となっていた。だが、キュレーターの遠藤水城の企画により、2017年に再制作が行なわれた。國府の存命中に同作品の展示に友人として携わったアーティストの白石晃一が作業を担当し、アートメディエーターのはがみちこ、そして筆者が記録担当として参加した。國府は設計図や稼働マニュアルを残していなかったため、記録写真や映像の調査、遺族や関係者へのヒアリング、エンジン専門のエンジニアにアドバイ

スをいただき、試行錯誤しながら再制作は進められた。現存するのは「水槽」のみであるため、オリジナルと同じ車種・型番の中古エンジンを使用し、計2台のエンジンの再制作を行なった。

この再制作2台はそれぞれ、オリジナルが発表された京都のアートスペース虹での「國府理 水中エンジン redux」展（2017）の前期・後期で展示された。また、関連イベントとして開催されたトークシリーズの採録を、本年度の紀要に掲載しているので参照されたい。

本年度は、美術評論家の榎木野衣の企テブリ画・監修による「平成美術：うたかたと瓦礫 1989-2019」展（京都市京セラ美術館、2021）に再制作プロジェクトチームが「作家」として参加した。この展覧会は、平成の30年間で、「災害・事故と美術」というキーワードで振り返り、コレクティブな活動形態をもつ作家群を通して時代への応答を提示するものである。本展では、①展示室内でのエンジン稼働と水の持ち込み不可、および②アクリル水槽の保存の観点から、作品の完全な再現展示を諦めざるをえなかった。その代わりに、オリジナルと再制作の両方が展示されたアートスペース虹の空間サイズを忠実に再現し、水中稼働時の「エンジン音」を流すことで、さまざまな「不在」—オリジナルのエンジン、國府自身、水槽を満たす水、そして閉廊したアートスペース虹—を想起させることを試みた。併せて、國府によるオリジナル発表時のステートメントやドローイングを展示し、國府へのオマージュや作家の思考への理解につなげられるようにした。

さらに、展示の一部として、プロジェクトの詳細なドキュメントをPDFカタログとしてまとめ、芸術資源研究センターのウェブサイトで公開している。

構成内容は、オリジナル／再制作の展示歴、稼働の動画記録、再制作の作業記録、「國府理 水中エンジン redux」展のトークシリーズの採録、そして再制作作業を担当した白石晃一による技術面の論考、國府によるドローイングである。併せて、対となる2つのステートメント—遠藤水城による再制作プロジェクトのステートメント、國府理によるオリジナル発表時のステートメント—を再掲し、《水中エンジン》という作品およびその「再制作」の試みが、現代社会とアートの双方へ投げかけ続ける問いを読者と共有する契機としたい。

<http://www.kcua.ac.jp/arc/wp/wp-content/uploads/2020/12/EitW.re-creation.document.pdf>

高嶋慈（芸術資源研究センター非常勤研究員）